

## 第1部門A 伝統・日本

### 菊切手 <sup>はまや</sup>濱谷 <sup>あきひこ</sup>彰彦 (東京都) ⑤

菊切手は、図案の中央に菊花紋章を配したことから、そう呼ばれている。1899年(明治32)1月1日から1907年(明治40)までに18種の切手が発行されている。菊切手が製造・使用された時期は、日本の産業革命期で、郵便物の量が増大していた。そこで、郵便切手の製造効率を上げるために、これまでの単線目打器のほかに櫛型目打器が導入された。その結果、目打にはバラエティが存在する。展示では、刷色、目打、銘版、見本・みほん、消印それに使用例を、額面ごとに分類整理した。

### 菊切手

菊切手は、中央に菊花紋章を中央に配し、これまでの切手にあった英語の国名表記を廃止して、国家主義の風潮を色濃く反映した図案となっている。

また菊切手の時代は日本の産業革命の振興期にあたり、経済活動が活発化して郵便物の量も増大していた。各郵便種別に対応するため、1899年(明治32)1月1日から1907年(明治40)までに18種の切手が発行されている。また郵便切手の製造効率を上げるために、これまでの単線目打機のほかに櫛型目打機が導入された。その結果、目打には単線12、単線12<sup>1</sup>/<sub>2</sub>、櫛型13×13<sup>1</sup>/<sub>2</sub>、櫛型12×12<sup>1</sup>/<sub>2</sub>の4種の基本目打のほかに単線12、12<sup>1</sup>/<sub>2</sub>の複合目打が存在する。

また長期間にわたって製造されたため、色調にも変化が生じ、色調によって製造時期を判断することも可能となっている。更にこの時期は積極的に外国に進出したこともあり、外地や欧文の消印や郵便(外信便)が多い。

菊切手の時代に日本では初めて切手帳が発売された。切手帳は持ち運びが便利のように、表紙を付けて小冊子にまとめたもので、6額面が発行されている。

本展示では、色調の分類、目打変化、銘版(大日本帝国政府印刷局製造)、見本・みほんのタイプ、それに各種消印、使用例を、額面ごとに配した。

#### <菊切手 2 銭>

初期使用 第1種郵便(有封)  
封書2銭(～明治32.4.1日)



陸奥・弘前 32.1.31 口便→振津・大阪

初期使用 第1種郵便(有封)・書留  
封書2銭+書留10銭



摂津・大阪川口 32.1.26 又便→福摩・鹿児島

#### <菊切手 4 銭>

  
見本

  
みほん

  
赤

  
にぶ赤

  
うす赤

  
L 12

  
L 12<sup>1</sup>/<sub>2</sub>

  
C 12×13<sup>1</sup>/<sub>2</sub>

  
C 13×13<sup>1</sup>/<sub>2</sub>

  
丸一印・標号空欄

  
観型-D 観立

  
観型-C 観立

  
観型 33 観

  
朱印(貯金用)

  
朝鮮型(D 観立)  
(下は3銭切手)

#### <菊切手 1 円>

新紙表記郵便(菊切手 3銭 10銭との混貼)



下総 銚子 局行  
下総 銚子 大着  
福岡 治子 様  
貳百圓

東京 皇太極 奥河岸  
伏見 商店

東京 40.10.12 后 7-8 - 下総・銚子

15